

第8回グローバル地域文化学会大会 学術講演記録

オセアニアの少数言語

- 日 時 : 2020年12月10日 (木)
- 場 所 : 同志社大学今出川キャンパス良心館202教室
- 企画・運営 : 2020年度GR学会学術講演会実行委員会
- コ・ヨンジン (グローバル地域文化学部 教授)
- 副島 一郎 (グローバル地域文化学部 教授)
- 向 正樹 (グローバル地域文化学部 准教授)
- 日高 希南 (グローバル地域文化学部 アジア・太平洋コース4年次生)
- 与小田 茜 (グローバル地域文化学部 アジア・太平洋コース3年次生) ※司会
- 加藤 結子 (グローバル地域文化学部 ヨーロッパコース1年次生)
- 松沢 優希 (グローバル地域文化学部 ヨーロッパコース1年次生)
- 森下 美緒 (グローバル地域文化学部 ヨーロッパコース1年次生)
- 荒木 美砂 (グローバル地域文化学部 アジア・太平洋コース1年次生)

開 会 の 辞

司会 本日はお集まりいただきましてありがとうございます。ただいまよりグローバル地域文化学会学術講演会を始めさせていただきます。まずはじめにグローバル地域文化学会会長・グローバル地域文化学部学部長の遠藤先生よりご挨拶をいただきます。

遠藤 本日は京都大学の千田俊太郎先生をお招きして「オセアニアの少数言語」について、お話をいただきます。10日に一つ、言語が消えていっているという話も聞くことがあります。今日のご講演を楽しみに拝聴させていただきます。よろしくお願いいたします。

司会 本日の講師の紹介をしていただきます。

——(コ・ヨンジン) 千田先生は1974年、東京生まれで横浜育ち。1992年、京都大学文学部言語学科に入学された後、同大学院に進学され、今日のテーマであるドム語についての研究で修士号・博士号を修得されました。その後、同志社でも一昨年まで教えられた経験もあります。2011年～2013年、熊本大学で務められた後、2013年10月から京都大学准教授を務められています。先生は言語学の専門家で、英語、コリア語、エスペラント、ドム語など6言語以上の言語を研究されているエキスパートでもあります。今日は楽しみにしています。よろしくお願いいたします。

オセアニアの少数言語

千田 俊太郎 (京都大学大学院文学研究科准教授)

京都大学の千田俊太郎と申します。「オセアニアの少数言語」についてお

話をさせていただきます。コロナの状況の中でたくさんきていただき、ありがとうございます。私のワールドワークの写真を画面に出してみたいと思います。私がいくところはパプア・ニューギニア、主にドムという地域です。これは伝統的な衣装、祭の衣装で、普段着ではありません。部族間で友好の儀礼をしているところです。お祭の場では派手な格好をすることもあります、こんな格好をして暮らしている人はいません。



これは日常的な風景。畑を耕して帰ってきた親子、あまり木の生い茂っていない山でスコップをもっていきます。このお母さんは数年前に亡くなりました。今ではスコップの先は金属でできていますが、昔は金属器がなかったので木の掘り棒で掘り起こしていたようです。お母さんが

頭から袋のようなものをかけています。この地域に特徴的な鞆です。この中に掘ってきた芋が入っています。隣に立っているのは息子です。

ここはドムの村ですが、ドム人でない人が、たくさん混じっています。お世話になっているお母さんはお隣のナウレという部族の人です。この人はドムの人ですが、山の裏側の別の氏族の人です。同じ氏族の中では結婚できないものですから女性は遠くから嫁いでくる。土地は父から息子へ、父系で受け継がれるので男性はドムですが、常に外から別の氏族やドムでない女性が入ってきます。このお母さんは頭から鞆を下げています。





この村の市場の様子。市場は必ずしも経済的な活動の場ではなく、毎日のように人が集まってくる場所です。日向ぼっこをしたり、奥の方では賭けのトランプをしたり、しています。そんなのが市場というところ。手前に店を広げている人がいます。並べているものの中には町で

買って来たものもあります。塩を大きな袋で買ってきて小分けして売っている。袋のラーメンはみんなの大好物です。精製油や精製塩がなかったところに、いきなり人工調味料の味が入ってきて、人をとりこにしまった。手前の黄色いのはキュウリ、日本より太いものですが、おやつのような感じで食べる。食事に出てくることはありません。市場で買い食いするようなものです。自分で育てたのだと思います。野菜がおいてありますが、どの家でも同じようなものしかつくってないので、どうしてこれが売れるのかなど。今日は収穫が面倒だと思いと買いにくるのかもしれませんが。こちらは甘い汁の入ったチューブです。

普段の食事。最もシンプルな食事は焼き芋だけの食事です。サツマイモ、真ん中はキャッサバ。不思議なことにどちらもアメリカ原産です。何百年も前に、おそらくは大航海時代のポルトガル人がニューギニアの



沿岸部にもたらしたものがアツという間に入ったということらしいので何百年もたっているようです。なかには「南米と直接交流があったのではないか」と推測している研究者もいます。おらずに野菜が出てきます。これは日本にもある四角豆とい

う豆で日本では若いうちに摘んで皮ごと食べることが多いのかもしれませんが、ここまで大きくなると皮は食べられません。その他、ササゲのような豆、カボチャ、こんなものが日常のおかずです。

ドムの人々はみな農家です。奥地の山の高い方が、よい作物ができるといわれています。ある人が奥地から村へ出てきて、お土産にリュックサックいっぱいの野菜を詰め込んできた。キャベツが見えますね。このような西洋野菜も今はつくるようになってきました。野菜がよくとれるところでない、キャベツなどはつくれない。こうして野菜の詰まったかばんをいなかの飛行場で見かけることがあります。高地からパプア・ニューギニアの首都



ポートモレスビーへ飛ぶ人たちのものです。首都は海岸部なのですが、そっちでは気候が暑くて野菜ができない。高地から首都に出る人はリュックか大きなスポーツバッグに野菜をウンと詰め込んでチェックインする。田舎の空港では機械で調べることもできませんから、人が、手で手荷物検査をする。開けると野菜がいっぱい入っている。その様子がいつもおかしくて。そこで写真を撮ればいいのですが、残念ながら写真撮影が禁止されています。フィールドの様子を見ていただきました。今度はレジユメを参照してください。

1、少数言語の相対性と言語的少数者を認める観点。基本的な情報をまとめておきました。世界の人口は今、70億を超えています。世界に言語がどれくらいあるか。統計によって大分違います。しかし何千のオーダーになります。一つの目安として7000言語くらいという統計があります。世界の人口を世界の言語数で割ると1言語あたりの平均話者数が出る。100万人になります。話者数で言語のサイズをはかると1言語あたり100万人、みなさんの感覚ではどうでしょうか。我々は1億を超える話者人口を抱えている言語を話しています。平均で100万人というと「そんなに少ないの？」という感じをもつ方が多いのではないかと。ところが、実は100万人というのはまだ相当に

大きい言語です。統計資料を見る時、平均という観点から「普通」のサイズを見ることができるわけですが、「中央値」という別の数値を見るのも重要です。「中央値」を見るにはまず、言語の話者が大きい順に並べていく。ランキングをする。順位の半分のところの値がどうなっているか、これが中央値です。世界の言語、話者数順にランキングすると、トップ10は話者数が億を超えている。10億を超える言語は中国語ぐらいかもしれませんが、億のオーダーの話者数をもつのがトップ10に入ります。日本語もトップ10に入ります。残りの人口を下位の言語が分け合っているという構図になる。平均よりも中央値がずっと低いゆえんです。一言語あたりの話者人口の「中央値」をとってみると7000になります。世界の多くの言語が7000くらいの話者しかいないということです。そうすると「少数言語」とはどういうものをいうのか、感覚が少し変わってくると思います。少数かどうかは、地域によって、国によって、相対的に考えていくことになります。

オセアニアでも「大言語」が話されています。一番広い地域で多くの話者に話されているのが英語。オセアニア地域はオーストラリア、ニュージーランドを含んでいますし、ハワイにも英語の話者がたくさんいます。その他、アメリカ領サモア、アメリカのグアム準州、ミクロネシア連邦、パプア・ニューギニアなどの国々が「公用語」の、少なくとも一つとして指定しています。中にはパプア・ニューギニアのように母語話者がほとんどいない国もあります。パプア・ニューギニアの場合、母語話者どころか英語を話せる人は少ない。しかし公用語です。その他、フランス語が公用語として採用されているところもあります。スペイン語はイースター島だけではないかと思いますが、チリの領土ですからスペイン語が公用語になっています。こういう言語は「大言語」ですが、すべて外から入った言語です。オセアニア土着の言語で話者数が最大のものはサモア語ではないかと。37万人の話者数があります。世界の言語の母語話者数平均値が100万人ですから、数は平均を割っています。その意味ではオセアニアの土着の言語はすべて「少数言語」だということもできます。その他、フィジー語も人口で35万人くらいいます。この人口は「フィジー語」の話者の人口で、フィジーの人口ではない。人口はその倍くらいいます。フィジーはイギリスの植民地だった時代に綿のプラン

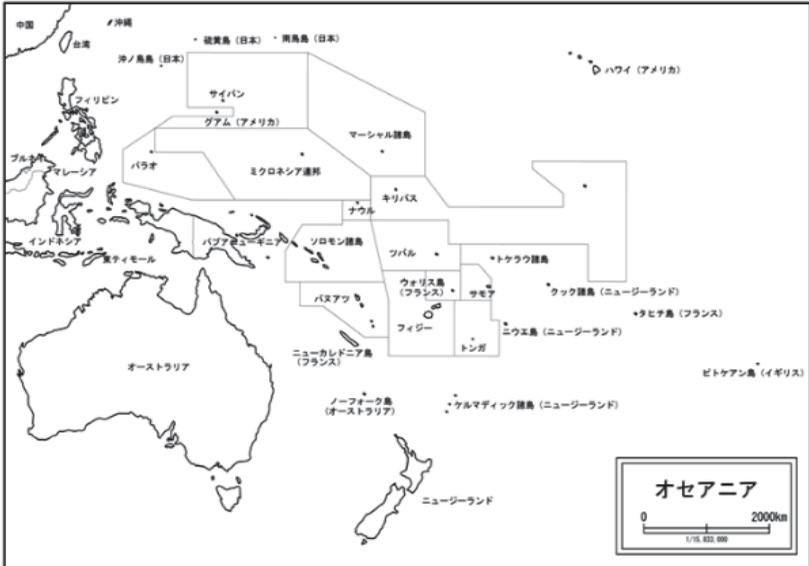


図1 オセアニア地図 (<http://www.freemap.jp>)

テーションをもって労働者としてインドからたくさんの人を移したということでフィジーにはフィジー語以外にもう一つ「フィジー・ヒンドゥスターニー語」という主要な言語があります。こちらが人口が若干、多いようです。またフィジーの公用語には英語もあります。フィジー系の人とインド系の人話す時に使うそうです。オセアニアでこの次に大きな土着の言語が西ダニ語になると思います。人口約18万人のインドネシアのパプア州の言語でニューギニア地域では最大の母語話者を抱えている言語です。その次がパプア・ニューギニアのエンガ語。パプア・ニューギニアの国内で最大の母語話者を擁する言語です。

地図を見ないと何のことかわからなくなってきたと思いますので地図を見てください。ニューギニア地域と言いました。オーストラリアの北側に相当大きな島がありますが、これがニューギニア島。この辺りを「ニューギニア地域」と呼びます。ニューギニア島は真ん中に縦の線がまっすぐにあります。植民地分割をされた国によくあるタイプの国境で、自然、人間の住み方、暮らしとは関係なく、国境線が引かれている。東側が「パプア・ニュー

ギニア」で独立国です。「パプア・ニューギニア独立国」が正式名称です。オセアニアには独立国という正式名称をもつ国が二つあって「サモア独立国」と「パプア・ニューギニア独立国」がある。西側は元オランダ領ニューギニアですが、インドネシアに組み込まれています。「インドネシア・パプア州」というのはニューギニア島の西側のことをいいます。「パプア・ニューギニア」は東側だけです。

オセアニア地域をどう分けるか。オーストラリアを一つの地域とみます。その他の地域を3つに分ける。「ポリネシア」と「ミクロネシア」と「メラネシア」。ポリネシアはハワイとニュージーランドとイースター島。つないでいくと正三角形ができます。この中に納まる地域がポリネシア、「たくさん島の島」と呼ばれる地域。残りがオーストラリアと日本に挟まれた地域、これをさらに二つに分けて日本に近い側、パラオ、グアム、ミクロネシア連邦、マーシャル連邦、キリバス、ナウル、などの国々を含む地域をミクロネシアと呼んでいます。「小さな島」という意味です。残った地域はニューギニア、ソロモン諸島、バヌアツ、フィジー、ニューカレドニアなどを含み、これが「メラネシア」と呼ばれます。「黒い島」という意味です。島が黒いわけではなく、島に住んでいる人の肌が黒いということでしょう。メラニン色素のメラですね。地域分けをしますと私はニューギニア島の西部まで「メラネシア」といっていますが、高校生の地図帳ではニューギニアの半分、西側までが東南アジアに分けられていて、東はオセアニアで、ニューギニアの真ん中に東南アジアとオセアニアの境を示すものもあります。

先程のサモア、話者人口が多い言語が話されているのはポリネシア。フィジーはメラネシアですが、サモアに近いところにあります。西ダニ語は西ニューギニアのこのあたりです。エンガ語は、パプア・ニューギニアのこのあたりです。ともにニューギニア高地の言語です。ここまで母語話者の人口順に見てきました。人口順ならエンガ語の次はメルバ語になるかと思いますが、このあたりから順位以外の話をしたと思います。「トク・ピシン」、第一言語とする話者数は15万人くらい。これだけでもオセアニアでは「大言語」に入るといってもいいのですが、トク・ピシンは母語話者よりも、第二言語話者や第三言語、第四言語として話す人も多く、合わせると400万人く

らいます。400万というのはパプア・ニューギニアの人口の約半分です。パプア・ニューギニアの人全員が話せる言語はありません。パプア・ニューギニアで一番通用する言語がトク・ピシンです。共通語としての役割を見る時には「トク・ピシン」は大きな言語となります。しかもこの言語はバヌアツで話されている「ビスラマ語」とか、ソロモン諸島で話されている「ソロモン・ピジン」とも相互理解がある程度可能で、国際的な言語でもある。その他、「タヒチ語」約13万人、「トンガ語」10万人、このあたりは地域の、国の主要な言語とっていいと思います。「マオリ語」5万人、ニュージーランドの言語ですが、マオリ語は主要な言語とはいえないこととなります。マオリ語のような場合を少数言語といますが、しかしトンガ語を少数言語ということは、あまりない。国の主要な言語ですから。それに対して「ドム語」はどうか。私が主にやっている言語ですが、2万人の人口がいます。パプア・ニューギニアの言語の一つです。パプア・ニューギニアには言語が800あり、そのうちの一つとしては若干、大ぶりです。しかし「パラオ語」、人口15000人でパラオという国の主要な言語です。パラオ語のような立場は「少数言語」と普通、いわない。「ナウル語」も一つの国家の言語です。人口6000人。国別、地域別に見ると、話者人口だけで少数言語かどうかは決まらないことがわかります。地域内で有力な集団であれば、教育で使われる言語になる、など言語の使い方にも影響を及ぼすからです。

オセアニアの言語を、ごく大雑把に見るとどうなるか。世界の状況とは若干、違う部分があります。オセアニアの言語の母語話者の平均値が5300人。世界の言語で見た平均値100万と相当違います。オセアニアの言語は世界でも小ぶりの言語が多いことがわかります。母語話者数の「中央値」は1000人、世界では7000人ですから、オセアニアの言語は全体的に小ぶりの言語が多い。1000人の話者数でも、まだまだ子どもが自然に獲得する言語であれば、消滅の危機に瀕した言語ではない。1000人くらいの人の間に脈々と受け継がれてきた言語もあります。パプア・ニューギニアに限った数値を見ましょう。母語話者数平均が4470人。母語話者数の「中央値」が1196人。オセアニア全体の状況と、そんなに変わらないと思います。

世界をアフリカ、南北アメリカ、アジア、ヨーロッパ、太平洋の5の地域

に分けて言語の数、話者の数を出しておきました。太平洋の地域は1306の生きている言語があり、それを話している話者は全部で700万くらい。話者数に対して言語の数が非常に多い地域だということがわかると思います。対照的なのはヨーロッパ、人口が多いのに比べて言語数が少ない地域といえます。

オセアニアの中でもニューギニアは多様です。オセアニアの他の地域、ポリネシアやミクロネシアは一つの語族に属する言語が話されています。「オーストロネシア語族」。ニューギニアの言語の分布を見ますと語族の分布図を見ても複雑になっています。この地図ではオーストロネシア語族以外の言語を43のグループに分けています。言語の分布図ではなくて語族の分布図です。一つひとつのグループの中にいくつもの言語がある。中央部に、かなり大きい語族が見える。パプア・ニューギニアからインドネシアにかけて分布する、「トランスニューギニア」と呼ばれるグループで、このグループが成り立つのかどうかは、まだ決着がついていません。こんなに大きな語族が成立するかどうか。さらにトランスニューギニアの中のサブグループを見ると35くらいある。これらがそれぞれ独立の語族だと考える研究者もいます。いずれにせよ、語族自体がニューギニアの中に何十もあることになっています。初めてニューギニアに行く前に下調べして、この言語多様性が面白そうだと思って、行くことにしました。

私が行っているのはシンブー州で、「シンブー語族」の地域です。グループの地図でいうとシンブー・ワギの一部です。これはシンブー州の北半分の言語の分布図です。北には「クマン」グループがあります。大きな言語です。「クマン語」と呼んでもいいかと思います。クンディアワという町がありましてシンブー州の州都です。西の方にはゴリンググループ、飛び地のようなところもありますが、かなり大きな言語グループです。このグループを言語の単位と考えて「ゴリン語」と呼んでもいいのではないか。「スワウエ」グループが東側にあり、それに囲まれたところが「ドム」です。「ドム」と「エラ」、この地図は迷いながら「言語」と「部族」の折衷的な地図を描きました。「ドム」という部族がいて「エラ」という部族がいて、同じ言語を話します。それを「ドム語」と呼んでいます。東隣に「ディカ部族」と「ニマ

イ部族」がいて同じ言語を話します。ドムは部族としてはディカと深い関係にあったのではないかと思っています。一つは言語的な証拠で、よく似ている。歴史的に深い関係があったからかなと。もう一つはドムの伝説にディカが出てくる。

ニューギニアとパプア諸語。ニューギニアは世界で二番目に大きな島で日本の2倍くらいあります。パプア・ニューギニアという国はニューギニア島の東半分と周辺島嶼からなる世界で一番、言語の数が多いい国です。ドム語は「パプア諸語」と呼ばれますが、パプア諸語とはニューギニア島とその周辺に分布する「非オーストロネシア系」の諸言語のことです。

ドム語はどんな言語か。言語学者に説明すると、「母音音素が5つあって子音音素が13個ある。語声調のシステムがある。動詞語根が少ない。100いくつくらいしか見つかっていません。構成素順でいうと主語、目的語、述語の順番。名詞と形容詞の順番は名詞の後に形容詞がくる。名詞と指示詞では指示詞が後にくる。名詞と数詞では数詞が後にくる。複数の人称システムが混在している形になっていて代名詞の人称システムと動詞の一致の人称システムが違う。複数の引用文の間接化システムがあり、それが混在している。」ということになります。指示詞は、日本語の場合は「こ、そ、あ」の3つに空間を分割しますが、英語は *this* と *that* の2つですね。「ドム語」は日本語のように3つの空間分割をする上に、上中下で異なる形式の使い分けをする。細かいのを入れると12くらいの指示詞があって使い分けています。

今日は「数え方」について。ドム人が一般的にどんなふうにものを数えるか。wan, tu, tri, po, paip, sikis, sepen, et, nain, ten。「エツ」と思われたかもしれませんが。「英語から入ったのではないか」と。元をたどれば英語ですが、直接にはトク・ピシンから入っています。トク・ピシンの発音そのものです。言語学の教科書でも西洋で書かれたものを翻訳したのものには「一つの系統に属する諸言語には、基本語彙が共有されていることが多くて、数詞のように基本的なものは同系諸言語の間で典型的によく一致する」と説明が書いてあることがあります。数詞は、しかし、そうではなく、借用されやすい品詞だと思います。借用が起こった言語の例にアジアの言語やオセアニアの言語には多い。日本語だと、どうなりますか。どう数えますか。多くの方は、「イ

チ、ニー、サン、シー、ゴー、ロク、シチ、ハチ、キュー、ジュー」と数えるのではないですか。これは日本語でしょうか。もちろん日本語ですよ。しかし起源的には日本語ではない。漢字の音読みの言葉は昔、中国から入ってきたものです。今の数詞は漢数詞です。固有数詞ではない。固有数詞はどんなものか。「ひい、ふう、みい、よお」ですね。これで数える人はいますか。どこまで数えられますか。がんばって現代語の話者は「とお」（10）までいく。がんばれば。「とお」（10）を日常的に、いつ使いますか。文房具屋さんについて「鉛筆、とおください」といわないですね。今日の日付、12月10日の「とおか」のような、複合語の中に「とお」という要素は残っていますが、単独ではほとんど使われない数詞です。固有語で10以上を表す言葉が昔は日本語にもあったわけですが、大きな数から漢語に置き換えられていって今では数えあげる時に使う数詞は漢数詞に変わっていると思います。しかも相当、昔にそういうことが起こっています。「ドム人」は、わりと最近、外来の数詞を採り入れたということです。その他、*ta*, *ta*と指さしながら、「ひと一つ、ひと一つ」というような数え上げ方もあります。数え上げた結果、いくつあったかは、わからない数え方です。

「ドム人の多言語生活」について。ドム語しか、しゃべらない人はいないと思います。現代人はトク・ピシンを子どもの頃から自然に獲得します。多くの人は母親の言語が違います。向こうの習慣ではお母さんの出身地域に何日も何カ月も居候生活をして、そっちの生活の経験をするのがよくある。そういう機会に母親の言語を話せるようになります。女性であれば結婚をしてドムの外に出ていく、またはドムの外から入ってくる。そこで配偶者の言語を話すようになる。部族間戦争をすると負けちゃった方は避難して別の地域に身を寄せると、その地域の言語を話すようになる。私がいつている村は「クマン語」の諸方言と隣接している地域で、クマン語諸方言を話す人がたくさんいます。その他、「ミド・ワギ語」「コテ語」とか、その他の言語を話す人を見たことがあります。特に、クマン語キンデコンド方言を話せる人が、ほちほちいます。この言語を話すことは、リーダー格の人だったら必須の技術で他の部族との交渉をする時、儀礼で演説する時、クマン語を話すことになります。話せないとリーダーにはなれない。キンデコンド方言は、一

時、この地域のミッション・リングアフランカとして拡大して今は、ちょっと勢力が弱まりました。そして学校に通う人は英語を話します。学校では英語しかしゃべっちゃいけません。

月刊『言語』という好きな雑誌でしたが、そこに2006年に書いたもの。「ドム誕生の伝説」によると昔、「デイカ族」の娘が二人で森を散歩していると煙がたつのが見えた。誰かと訪れると赤ん坊が泣いている。これが「ドム」です。その赤ん坊は、のっぺらぼうで目も口もない、腕も足もない。娘たちは竹を割って切り込みを入れるのに使った。目をつくって鼻をつくって口をつくった。そうするとしばらくすると美しい青年になった。我々がつくったんだから我々が結婚すると言って二人とも結婚する。生まれた子どもたちが今のドム人になったという伝説です。ドムとデイカが特別な関係があったのが伝説になって残っているのではないかと考えています。

今のような生活になる前に西洋人との接触があり、物質文明に触れるようになった時代があった。白人との接触にあたって、塩にびっくりした。飛行機にびっくりした。お金、金属器、罐詰、いろんな新しいものが入ってきたという話を、じいちゃん、ばあちゃんに聴くこともありました。ここの人たちは新しいもの好きで便利なもの、いいものはどんどん採り入れます。今では道もできて車も通る、みな服を着ています。金属器も使っています。数十年で大きな変化を受けた。そして言語も変化しているということです。ドム語に外来の数詞が入るのにとどまらず、後から入ってきた言語であるトク・ピシンが、子どもの頃から自然に獲得される状態になっています。ドム人がドム語の通じない人たちとおしゃべりする時、トク・ピシンを使うのは共通語の役割ですが、ちょっと気になるのはドム人同士で話す時もトク・ピシンを使うことがあります。裁判の時とか公の場所で話をする時、トク・ピシンで話す傾向があります。中にはドム語よりもトク・ピシンを先に獲得する子どもも出てきています。

ドム語はどういう言語か。話者数が2万人くらいと紹介しました。今、そのくらいいると思います。2006年の時点で16000人くらいと見積もりました。よくきかれるのは「ドム語」で「ありがとう」はどういうんですか。「結婚おめでとうとドム語でいってください」とか。こういうのとぴったり同じ言

葉は、ないことが多い。「こんにちは」も、ない。「こんにちは」の代わりに、どんな表現をするか。みなさんが座っていて、私が後からきて声をかける際には「ああ、みんな、いたの」、答える方は「私たち、いますよ」という言い方をします。逆にみなさんから私に「こんにちは」をいう時、私が後から入ってきたら「ああ、きたの」、「はい、きたよ」と、こんな言い方をします。他にもパターンがありますが、単純な、これをいうだけでも、たくさんの「こんにちは」を覚えないといけない。なぜかというところ「いるの」という時、一人に対しては *mono?*、二人に対しては *moiplo?*、三人以上の複数では *molimo?*、と違う言い方をしないといけない。それに対して、みなさんの側で「いるよ」という時も一人が「私はいるよ」と言うのでは *moke*、「私たち二人はいるよ」と言うなら、*mopke*、「私たち三人以上はいるよ」なら *mopge* と区別されます。「いるの?」に3種類、「いるよ」に3種類で、このパターンだけで6つの形式を覚えないといけない。もう一つのパターンで、「きたの」というにも3種類あります。「きたよ」にも3種類ある。使い分けないといけない。どのパターンで「こんにちは」というか、12の形式を使い分けないといけない。動詞の主語が一人なのか、二人なのか、三人以上なのかで形式の使い分けが必ず生じる言語です。

トク・ピシンはどういうふうにしてできたか。元の元を遡ると大変ですが、近い昔では、サモアやオーストラリアのクイーンズランドにプランテーションがあり、オセアニアの各地から労働者が集められたことに関係があるようです。オセアニア各地から人を集めるとどうなるか。太平洋地域には言語がたくさんあります。いろんな言語的なバックグラウンドをもつ人が集まってくる。彼らの言語的な共通点は何だったか。プランテーションでボスが指示する言語だった。そこから語彙を拾いあげて自分たちの言語をつくったのがトク・ピシンの原型になっていった。

トク・ピシンは英語と語彙的には似ている部分が多いのですが、似てない単語もあります。例えば木のことはディワイ、虫のことはビナタン、食べるはカイカイ。しかし、英語に似た形をしているものの方が多い。ワン、トゥ、トリも、そうです。「私」「あなた」は「ミ」、「ユ」で語形変化しません。I とか your の形はありません。英語よりも簡単になっているかというところ、そ

うでもなく、英語の you は「単数」と「複数」を区別しない。トク・ピシンでは「ユ」のほか「ユベラ」というのがあって「あなた」と「あなたたち」と区別しないとイケない。正確にいうと先程のドム語と似ていて、多くのトク・ピシン方言では、一人の場合の「あなた」、二人の「あなたたち」、三人以上の「あなたたち」を区別する。

ニューギニアの人たちは、自分たちの民族語を、まず話す。その他、近隣の言語を話す、地域の共通語を話す、その上にトク・ピシンと、いくつもの言語を話す場合が多い。ただトク・ピシンが出てきたおかげでローカルな共通語の役割が少し弱くなってきて、今ではトク・ピシンさえできれば、いろんな人と話ができるので言語的な状況がトク・ピシンの出現で変わってきたといえるかと思います。

今、パプア・ニューギニアの学校教育は基本的には英語で行われていて英語での読み書きを習う。ドム語で書いたり、トク・ピシンで書いたりすることはないと思います。日常的に田舎の人たちは、そもそも文字の読み書きをほとんどしません。英語が入ってきたらトク・ピシンより英語が強くなっていくんじゃないかと思われることもありますが、みなさん、そんなに英語ができないので、どちらかというトク・ピシンの方が地域の言語にとって脅威になっていく可能性があるかなという感じがします。

トク・ピシンのことで面白いと思うのは、「ワントク」という新聞がある。トク・ピシンについて、ある種、よく知られたキーワードで、もともとは「同じ言葉を話す人」という意味。「ワン」は one 「一つ」で「トク」は talk からきています。わりと生産的な複合語のつくり方で、同級生や同窓生のことは「ワンスクル」、仕事の同僚のことは「ワンウォク」。それと同じように「ワントク」は「同じ言葉を話す人」ということです。もう少し広い意味になって仲間全般を指すようになってきています。新聞を名づけた気持ちは、どういうものかと想像すると面白いなと思って。「ワントク」を「トク・ピシンを共有している人たち」という意味に読み替えている。「トク・ピシンを共有する我々の新聞」、本来は、もっと小さな部族ごとの言語を共有する人たちを「ワントク」といいますが、新聞を「ワントク」と名付けた背景には「トク・ピシンが、パプア・ニューギニアの新しい言語秩序を作ってゆ

く」という気持ちだが、こもっているのではないかという気がします。

ドム語の固有数詞の話。ドム語に固有数詞が全然ないわけではない。あるんです。日本語の「ひい、ふう、みい」と同じで数え上げる時に使わなくなったのです。日本語でも表現によっては固有数詞が出てきます。例えば「一人」「二人」までは固有数詞が使われますが、「三人」は漢数詞を使います。ドム語では固有数詞がどれだけあるかという、数詞専用の語根は「1」に対するものと「2」に対するもの、この2種類しかありません。「一つ」はどうか。「テナン・タ」。「テラン・タ」とも発音します。二つの部分からなっていて、「テナン」に「タ」をくっつけたものです。それぞれは単独で使われることもあり、違う意味をもっています。「テナン」は「ただ一つ、同じ一つ」という意味です。もう一つの「タ」は「別の一つ」。こうしてみるとドム語のつくりは哲学的になっていると思うんですが、「一つ」って「ワントク」の「ワン」のように「同じ」だという側面を「一つ」で表すことと「別」だという側面を「一つ」で表すことがある。ドム語ではこの二つを形の上で区別する。「一つ」でも、「同じ一つ」と「別の一つ」という語根をつくっておいて、それを組み合わせると基本の「一つ」の意味になるという仕組みになっている。数詞の語根には「二つ」を表す語根もあります。「シュー」と言います。

「一つ」を表す複数の表現がどんなふうに使われされているか、自然発話の中から例を集めてきました。コロナで現地には行けませんので昔のフィールドノートを見て集めて、このようなことがわかりました。「複合表現」。「同じ一つ」と「別の一つ」からなる、複合表現「テナン・タ」は前半部分の「テナン」の働きと後半の「タ」の働きと両方を兼ね備えている。

最初の例は川の名前の話をしている。川が流れているが、その名前は「グラウ・ワ川」、「コバ・クラワ川」。ほんとは「一つ」だけれども、名前が二つ、ついている。流れている場所によって名前が変わる。その時に「一つ」だというのは「同一」の「一つ」である「テナン」を使う。「何々川と何々川は一つの同じ川だ」と。「一つの川」に名前が「二つ」ついている、という同じことをいう文脈で、「テナン・タ」という複合表現を使っている例もある。「テナン」と「テナン・タ」、同じように使えるということです。

次の例は、「子どもを二人産んだが、一人目は息子、もう一人は娘」。数えあげる時の「タ」で、「一人はこれ、一人はこれ」、というのだから、同じじゃない、別なんですね。次の例文は、「子どもを産んだが、一人は男の子、一人は女の子」で、男の子の方には「テナン・タ」とついている。女の子には「タ」しかついていない。このように、言語の形式の使われ方が、どんなふうにも並行的に現れているかを、今年、論文に書きました。

「ドム語」は数詞専用の語根としては2種類しかない。「一つ」と「二つ」に対するもの。3以上は複合的な表現で、いろいろな工夫をします。3つは「二つ」+「別の一つ」、「シュータ」が3。語根レベルでは増えてないのですが、組み合わせで「三つ」を表す。「四つ」は「二つとって二つとって」で、「シュー・イ・シュー・イ」。「五つ」は「シュー・イ・シュー・イ・タ」で、「二つとって二つとってもう一つ」。そして「六つ」は「シュー・イ・シュー・イ・シュー・イ」で、「二つとって二つとって二つとって」。これでいくと「2」ずつ増えていくのを何度もやらないといけなから、どんどん長くなる。

この言い方の他に、彼らは「指折り数える」ことをします。そこから出てきた別の表現があって「五つ」は「手の片方、全部」。指折り数える時、そのまま示したりもします。指を折って数えるか、広げて数えるか。彼らは必ず、指を折ります。しかも左の小指から折っていきます。右利きが多いからだと思えます。右の手を添えながら折っていく。左の指を折る。小指、薬指、中指、人指し指、親指。五つまで終わると言語表現も並行していますが、「片手と、もう一つ」で「六つ」。こっち側の小指を折る。今度は右手を小指から折っていきます。彼らは折った状態を見せてくれます。「2」という時には、こうして示す。最初、わかりにくくて。「俺には」といって、おじいちゃんが、「子どもが、これだけいるんだ」と両手の拳骨を叩き合わせて「何しているんだろう」と思ったら「10人」いたんですね。全部折って両手で示して。手で指折り数えるのと並行した表現を使って「5」のサイクルを加えて、それと「タ」(1)、「シュー」(2)を組み合わせると「七つ」は「片手と、さらに二つ」。「八つ」は「片手と三つ」。両手の後、足にいきます。丁寧な人は足の指も折っていきます、小指から。全部、折れると「両手

両足」と表現して、「20」。昔は「20」をサイクルに使って、言い方としては「20」は「人っ子一人」。さらに「もう一人、もう一人」という数え方ができる。そのくらいの数までは固有の数詞で言い表すことができた。言語形式、長いですね。大きな数をしょっちゅう使うようになると利便性は、それほど高くない。

彼らは大きな数を、どうして必要としなかったのか。我々のように日常的に大きな数を使っていると疑問に思うかと思いますが、大きな数を使わないのがあたりまえの状態だったんだなと私は納得しています。というのも、100以上の数は日常的に、どんな場面で使いますか。お金の話をする時くらいではないか。コロナの状況下で教室の定員は何人で、何人くらいが来場しそうか。これは現代的なセッティングですね。彼らは結婚パーティでも豚肉を、来た人に分けないといけない時に数えていない。数えるよりも「誰々さんの肉」があるかどうかを確かめます。一人でも忘れたら大変なことです。固有名詞の方が彼らにとっては大切です。豚を等分に分けて「何分の1」という計算をするのではなく、「誰々さんの分」と確認していけばいい。そして、お金などなかったわけです。西洋文明と接する以前、お金はなかった。使ってなかった。

というわけで今日は数字をたくさん出して最初に話者人口の話をしました。これなども、現代的な営みですが、このような文明の中に彼らもどんどん取り込まれていきます。その際、大きな数を表すのに便利な表現を今後も使っていくでしょう。それがトク・ピシンの数詞が入っていった理由でもあります。

他にも面白いことが報告されています。次はドム語ではない。最初に見るのは「コロワイ語」。パプア諸語の中には、ドム語の他にも、身体部位や、手や足の名称を使って数を表すやり方が広くあり、中でもコロワイ語のタイプが、世界ではあまりない、珍しいパプア諸語に特有な言語表現です。「小指」が「1」、「薬指」が「2」、ドム人の数え方を知っていると、ぴったり同じ指の折り方で「3」「4」「5」と進む。その後でドム人と違って「6」は手首。「7」は前腕。「8」が肘。「9」が上腕。「10」が肩。首にあって耳にあって頭のとっぺんが折り返し地点。最初は左からやる。頭にきたら「13」

で折り返し地点。右側について耳、首、肩と降りてきて「13」で折り返したので右手の小指にいきつく時には「25」になっている。昔はコロワイの人たちは、これを使って「25」をサイクルにすると「25進数」です。人ひとりが25。これがさらにいくつあるかという表現を使っています。

似たようなシステムでも、いくつかパターンがあって必ず「25」のサイクルではない。「ウナ語」は頭の脇とてっぺんを区別して、「14」で折り返す。「27」で一つのサイクルになる。この場合は「27進数」です。しかしこのタイプの面白い数表現は、今、どんどん失われていっている。大きな数が必要なのは、お金のためです。お金の額面は十進法で書いてある。学校について十進法で計算を習う。それを伝統的なシステムに翻訳するのは結構、しんどいことだと思います。残念ながら面白い表現法は、どんどん失われていきます。

みなさんは「ある未開民族は数えることができない。数を数える表現がない。1、2の次は「たくさん」だって」という半分、都市伝説みたいな話を聞いたことはありませんか。これは不正確に伝わっているけれど、ドム語に、ある程度、当てはまる部分もある。不正確なのは、「1、2の後、全然、数えられない」ということはないんです。複合表現を使って、もっと上の数まで数えていました。ただ大きな数が必要なかったの、あまり大きい数表現をいうことは少なかった。数詞語根が「1、2」しかないことは確かです。

もう一つの関連することとしては動詞につく主語の数の区別、「一人」なのか「二人」なのか「三人以上」なのか。動詞を一つというたびに、どれか選ばないといけない。1、2、3以上の3つのカテゴリーしかないというよりは、その3つを必ず使い分けないといけない側面がある。わりと文法でも難しいことになります。言語によって、いろんなタイプがありますが、オーストラリアのアボリジニとか特にアマゾンの言語で、「1、2、たくさん」の話がいわれたり、パプア・ニューギニアの言語について「1、2、たくさん」という伝説が作られたりすることが起こっていますが、ほとんどの言語で「3以上」で複合表現があったり、今は「借用語」が入ってきていたり、中でも「単数」「複数」の区別を文法上のどこかにもっている言語も多いです。そうすると、「数が数えられないような民族がいるんだ」とか「数表現がほ

とどない民族がいるんだ」という単純な捉え方は、ちょっと早計なのかなと思います。

あとは挿入資料の書誌情報やユーチューブに載せた「ドム語」の話の情報などを載せておきました。私の話は、ここで一旦、終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。質疑応答の時間に入らせていただきます。

ラインのオープンチャット機能で質問を募集しています。この場で質問がある方いらっしゃいますか。

質 疑 応 答

質問 (会場) 興味深いお話でした。「ドム語」を話す人が「ドム人」といってもいいでしょうか？

千田 「ドム語」を母語として話す人は「ドム族」と「エラ族」がいます。エラ族の人は「私はドム語が母語だ」といいますが、部族はドムではない。言語の名前と部族の名前に若干のズレがあります。そもそもドム人たちは、一つの集団としてあまりかっちりした単位になっていない。緩いまとまりです。人類学者も、そのことを指摘しています。ではどこにアイデンティティをもっているか。氏族(クラン)ですが、部族(トライブ)よりも下の単位で血族の意識がある、氏族というのがいます。さらに、より強い帰属意識をもっています。「ドム」という言い方は部族の単位で、基本的にドム語を母語としますが、ズレもあります。彼らのアイデンティティはドムではなく、それより小さな単位にあります。

質問 (会場) 「トク・ピシン」が入ってきて「ドム語」が話せなくなっても特に大きな問題はないのでしょうか。「私たちは氏族である以上、ドム語を話すべきだ」という認識がありますか？

千田 今のところ、あまり意識をしていないのでトク・ピシンの役割がドム語にとって脅威になっているように思います。親が小さな子どもにトク・ピシンで話すことを、よくする。それはなぜかと聞くと「だってこの子たち、まだドム語をしゃべれないじゃないか」。ちょっと不思議な感覚だと思いますが、トク・ピシンは確かにドム語をしゃべれない人のための言語です。ドム語をできない子どもがいる。トク・ピシンで話しかける。トク・ピシンしか話せない子ども、トク・ピシンを最初に覚える子どもが出てくる。では「ドム語がなくなるのではないか?」といっても「いやいや、大人になったらドム語をしゃべるんだから」と答える。確かに、互いにドム語ができないとドムの村では生活できない。しかし、最近では人の移動が激しくなってドム地域の外に出て暮らす人たちが出てきた。その人たちはドムの村を離れて、ドム語を使っている人もいるが、使っていない人もいます。

質問 (会場) 歴史的に小さな言語が、どんどんなくなっていく流れにありますが、社会的な視点から「ドム語」が絶滅していくかもしれないことについてどう思われますか。

千田 言語が好きなので私のエゴイスティックな言い方になるかもしれませんが、「もったいないな」と個人的には思います。彼らは、それを意識していない。今のやり方を続けていって言語が続くかどうか、気にもしていないので、そこを伝えていくことは、しないといけなかなと思っています。実際に言語が使われなくなった場合、後で「取り戻したい」といって取り戻すのは、ものすごく大変なことです。実際に言語を失った民族が取り返す活動を日本の場合、アイヌなどがしているわけですが、昔と同様の、ネイティブの人が、再び生まれることにはならない。「そうなってからだと遅いよ」と現地では、なるべく言うようにしています。

司会 LINEのオープンチャットに学生からの質問がきています。パプア・

ニューギニアではトク・ピシンという共通言語があるにもかかわらず、なぜ教える教授言語が厳格に英語のみに絞られているのでしょうか？。

千田 トク・ピシンは大変広範囲に使われていますが、話者人口では国の人口の半分くらいで、全員ではない。トク・ピシンを話せない人もたくさんいます。その他、教材が英語だと調達しやすい。オーストラリア、イギリスでつくられた既存のものに手を加えてパプア・ニューギニア用にすることができる。英語で教育する仕方を教える先生しか、今のところ、いない。一方で、トク・ピシンの教材がない。それをつくる経済力がないのが一番です。10年ほど前から、ようやく小学校が無償化されました。それまでは有償でした。今でも、教科書は買わないといけません。小学校1、2年までは「トク・ピシンを併用して説明してもよい」と。低学年は読み書きは英語ですが、補助的な説明でトク・ピシンを使ってもよい。ただ、トク・ピシンを使う地域でないところから先生が赴任すると先生がトク・ピシンをしゃべれない。逆にトク・ピシンを使う地域から別の地域に赴任した先生は「どうしてこんなに通じないのだろう」と思う。国全体で一つの言語でないことと、ある言語の教材、教員養成は相当、お金と人手がかかるものだから、ということになると思います。昔は「地元の言語で教育しよう」とプログラムを立ち上げ、それに成功していた地域もあるんですが、それが成功したのがブーゲンヴィルという地域で、そこが内戦状態になってしまい、教育どころか、国自体が立ち行かなくなっていて、その後、あまり振るわないようです。「地元の言語で教育しよう」とか「ドム語を」とか。ドムにきている先生もドム人でない人の方が多いという感じです。

司会 (LINE オープンチャット質問紹介) パプア・ニューギニアは広大ではあるが、一つの国(島)と考えると「トク・ピシン」の活用にかかわらず、人々は他地域の民族語を理解することができるのでしょうか？

千田 だんだん状況が変わってきていると思いますが、昔はそんなに遠距離

の移動は簡単ではなかった。道がない、車がない。ジャングルがあり、山があって。何日か歩いていくと全然知らない地域に着くが、そんな恐ろしい冒険をする人はあまりいなかった。高速道路ができ、飛行機が飛ぶようになって状況が違ってくる。昔はある程度、近い距離の言語は把握していた。一人が全部、把握するのではなくても、コミュニティの誰かがコミュニケーションできる。そういう状態だった。3言語、4言語できる人がいて周りとの交流もあった。この移動が遠距離になると地元の言葉を覚えておくわけにいかないので、これまでの状況とは全然違う。それでトク・ピシンがこれだけ普及していったのだと思います。もともとはプランテーションで労働する人が言葉を持ち帰って、その人たちは遠方の人とも交流ができるのが、見ていてわかる。それでみんな使い始めた。以上で今の質問の答えになっていますか？

司会 (LINE オープンチャット質問紹介) たとえば「ドムの人々が民族語を理解することができるのでしょうか？。

千田 できます。今はまずはトク・ピシンですが、その他、お母さんの言語、配偶者の言語、暮らしたことのある地域の言語と複数に渡ることが多いので、3、4つの言語ができるのが普通です。ドム語を含めて。

遠藤 小さい地域で言語は「方言」とは違うんですか。地域の言語は文法とか単語が共通とか、そういうことはないんでしょうか？

千田 小さな地域に切り取った地図の中は相当に似通った言語グループになっています。兄弟分の言語が話されている地域とか西側にさらに従兄弟分の言語が話されています。グループ分けの地図に示してあったもの。「ここまでは一つの系統の言語である」と。「もともと一つの言語から始まって方言分岐が始まって言語に分かれていった」と考えられるグループ。これよりも大きな単位を考える人は「トランスニューギニアの全体が一つの語族であろう」といっていますが、そこまで確信をえられ

る証拠は、まだ上がってない。その他、トランスニューギニアの他に、これだけあるということですが、この中では一応、一つの語族で、中には言語の分岐が激しく起こっている部分もありますが、現代の言語に残っている証拠から「一つの語族だ」という固まりが、いくつかあります。

質問（会場） ニューギニアはどうしてこんなにたくさん言語があるのですか。

千田 難しい質問ですが、「この地域に人類が渡った歴史が長いから」という答え方になると思います。まだ氷河期の時代にニューギニアとオーストラリアが一つの大陸を成していた時、そこに人類はすでに到達していた。5、6万年前にここにきて住み始めています。もう一ついえるのは「大言語」の成立には必ず、ある種の人為的な何かがあります。「同化」が起こって大きな言語が成立するとか。小さな言語ができるのに、そんなに大きな理由はない。言語は変化するので別のコミュニティで別の変化を起こして、だんだんに違いが大きくなって言語が違ってくることがあります。変化がたくさん起こると「もともと一つの言語だ」と、わからないくらいになってしまう。ここに人類が到達した年代が早かった。そして言語的な「同化」が、あまり起こらなかった。それがいえるのは戦争しても「支配と被支配」の関係が生まれません。「メラネシアの平等社会」といわれていますが。オセアニアでもポリネシアでは全然違って、階級があって、日本と同じように鉄砲伝来の時代を経て、将軍たちが争って国を統一することが起こっていますが、メラネシアの場合は階級がなく、王さまがない。リーダー格はいますが、一人が絶対的な権限をもつことは、まずない。戦争をしても「支配と被支配」の関係が生まれません。勝った方が負けた方を追っ払うだけ。そういう闘い方になって、そこにも原因があるような気がします。

質問（会場） 言語が消滅するしかない場合、どのようにして話されなくな

るということですか？

千田 「話されなくなる」、どうでしょうね。今、起こってもおかしくないと思います。要因は子どもに自然に獲得されない言語になってしまったらアツという間ですが、どうして自然に子どもが獲得しないかという、親が、というより、周囲が使わないから。親だけではなく、友だちといっしょに話す言葉ではなくなるからということがあるかもしれないね。どうして、それが起こるか。なかなか難しいですね。

質問（会場） 親が「トク・ピシン」を最初に教えて「ドム語」を教えなくなるのか？

千田 子どもは親からも影響を受けますが、同輩たちの交流も言語の獲得に重要な役割を果たしているといわれます。子どもたち同士で「トク・ピシン」を使うことが多くなり始めると「ドム語」を大人になっても覚えられないかもしれないですね。「なぜか？」というところ。社会的な変化ですよ。

質問（会場） その部族にとって「ドム語」は、それほど重要ではないと。社会で生きていくためには捨てるでもいいという感じですか？

千田 「言語が失われる」という感覚を、まだもってないんだと思います。多くの場合、言語はそうやって消滅していく。ふと気がついたら「母語で話せる人が周りにいなくなっていた」ということが多いのではないかと思います。

質問（会場） 気づいた時には失われていると？

千田 いろんなケースがあって北アメリカでは1950、60年代に先住民の子どもたちを寄宿舎学校に強制的に通わせて英語以外を禁じた。先住民の言

語を話すと体罰をしたというやり方で、それがトラウマになって話せなくなり、そこからぶつ切りと継承が途絶えます。次の世代に伝わらない。そういう事情があった地域もあるし、オーストラリアのように伝染病が外来の人からもたらされたり暴力にあって亡くなったりすることが続いて人口自体も少なくなって、ということもあります。パプア・ニューギニアでは、都会にいくと周りの人間で「ドム人」でない人が多くなる。普段使っていないと家庭内で出てこないとか、いろんなケースがあると思いますが、パプア・ニューギニアの場合は「トク・ピシン」の力が強くなっていることが大きいですね。

質問（会場）「ドム語」を話す機会を増やそうとするのか、ただ「ドム語」の研究をするということなのか。

千田 確かに「言語が消滅しそうだ」となったら「もったいないな」と寂しい思いはありますが、私も社会活動家としてやっているわけではないので、言語の記録、分析をやっています。最後の話者がなくなった後、その言語の記録をした言語学者、しゃべる能力も身につけた言語学者が、民族の要請を受けて「復興運動の助けをしてくれ、その言語のことを教えてくれ」と要請があって手伝っている言語学者は何人か知っています。「ドム語」の場合は私の生きているうちに「ドム語」がなくなるといことは、なさそうなので、私はそういうことにはならないかもしれませんが。

質問（会場）「少数言語」が失われると、どういう文化的なマイナス面、影響があると思いますか？

千田 言語の消滅は大きなことだと思います。多くの場合、アイデンティティと結びついているという問題がありますが、ドム人の場合、そこがちよっと。血族の単位、自分たちが帰属意識をもつのが、「ドム」より、もっと小さい単位です。ただ、話者の環境の把握の仕方や文化のあり方

がドム語の語彙に反映しているところもあるし、トク・ピシンとは異なる表現法をもっています。また、「ドム語」に限らず、すべての言語は「人間の能力の発露」のようなところがあり、一つひとつ、ある種の芸術品なのかなと思っています。そこには「人間」という問題を解きあかす何かが詰まっているのではないかと。そういう意味では大事ですよ
ね。

司会 (LINE オープンチャット質問紹介) パプア・ニューギニアにはさまざまな言語が存在しているが、交流を通してそれぞれの言語の語彙の交換は現在も起こっているのでしょうか？

千田 最近では、どんどんトク・ピシンが共通語になる過程で、今ではトク・ピシンから一方的に語彙を受け取るだけの話になりつつありますが、それより前は、もっといろんなことがありました。ドムの近くはクマン語が地域の強い言語でしたので昔は、よその地域の未婚の女の子が、その地域の若い男どもが集まって歌を歌いに行く。その時の歌はドム語とクマン語のチャンボンで歌うことが多かった。そういうところにもありますが、クマン語からの影響は最近まで続いていてキリスト教の宣教活動をする時、シンプー地域で広く使われた言語だったのでクマン語でミサを行う、祈祷をすることがキリスト教の導入以後にも起こったし、さらには他地域の相当遠くの方、フィンシュハーフェンというのは東ニューギニアの地名ですが、そのへんの言語に入ったキリスト教の概念が、借用の形でドム語に伝わってきていることがわるとか。その言語間の交流は、わかる部分でも相当、複雑にありました。語族自体がたくさんある状態を解きあかすのに一つ障害になっているのが多言語の交流が、あちこちでいろいろあったので、それをどう解きほぐしたらいいかわからないことがあると思います。隣同士で、よく似た特徴をもっている言語がある、複雑に。

司会 (LINE オープンチャット質問紹介) ドムの人々は話すことを権利だ

とっていないのでしょうか。他の少数言語の話者は同化政策などで土着の言語の使用が禁じられると、権利の侵害を訴えるイメージがあります。「ドム語」は彼らの一部、アイデンティティという認識は薄いのでしょうか？

千田 どうでしょう。言語を2、3、4つ、できる状況を想像しにくいかもしれない。我々も、日本語を使う時、空気のように思って意識しないものである場合が多いですよ。いくつもの言語を切り換えて話せる人はドム語以外も空気のように意識せず話しているだけ、という。ドム語で話せない状況だったらドム語以外で話す。「ドム語で話そう」という意識はなく、相手によって、状況によって言語を選ぶ。そういうことをしているのかなど。

司会 (LINE オープンチャット質問紹介) メラネシアでは王さまが生まれなかつたという話ですが、何か社会構造的理由があるのでしょうか？

千田 理由まではわかりませんが、メラネシアは全般にそうだったらしい。フィジーが若干、例外らしいですが、王さままではいかないと思う。例えば、オーストラリアは明らかに活動を共にする集団が小さい。20、30人の集団で生活する。メラネシアはそこまででなくとも、大きな集団をつくって生活することが起こらなかったのだと思います。豊かだったからかもしれないですね。豊かだったというのは彼らは毎日、収穫しに行く。我々にはできない。冬があるから。保存するのは種くらい。食料を保存することはしません。お金も貯めることが苦手な人が多い。お金をどんどん使ってしまったら食べられる。富の蓄積が生じない。貧富の差、えらい人、弱い人が生まれにくいところがあると思います。

司会 (LINE オープンチャット質問紹介) 近くの地域で方言が発展、分岐していった言語が分かれていったとおっしゃっていましたが、「言語」

と「方言」の境界はどのようなものだと思いますか？

千田 相対的なものですね。比較的近い関係にあるもの、系統的に関係がある言語のうち、比較的近い関係にあるものを「方言」と呼ぶんですが、どこまで近かったら「方言」で、どこからが「言語」という基準は言語学にはありません。話者たちが感じる社会的な基準で大まかに決まっている。言語学者は相対的な近さの違いしか、いうことはできない。人によっては相互に理解できるような変種同士が「方言」であって、それができなくなると「言語」だという言い方をする人もいますが、厳密に境界線を引けない。相互理解の程度自体、程度問題であって。もう一つは「一方向では理解度が高いが、他方向では理解度が低い」現象もあったりして。「言語」と「方言」の区別を言語学では、しないんですね。アイデンティティの問題、社会、政治の問題になるかと思います。

司会 それでは質疑応答を終わらせていただきます。

——（コ・ヨンジン）千田先生、面白いお話をたくさんありがとうございました。お礼を申し上げます。みなさんの拍手で終わりにしたいと思います。

司会 以上で講演会を終了させていただきます。ありがとうございました。